

## 必ずやってくる津波と停電

■やれる事はやっておく

先月号のPSで津波対策として救命胴衣を備えておくべきことを記載した。一昨年の

12月に千島海溝・日本海溝大地震による津波の死者想定が発表されたがその対策は一年経っても遅々として進んでいない。避難タワーの建設や庁舎移転の検討などもされてい

るが30mの津波の脅威には立ち向かうこともできない。現実的に残された手段はハザードマップ地域の全住民に救命胴衣を配ることしかない。何割かの人が生き残れるかもしれないし、最悪自分や家族の遺体を回収してもらうことができる。悲しい現実だが防災担当者の最も大事な事は住民遺体の最後の一体までの回収になる。世界中の航空機が救命胴衣を搭載しているのは8600年に1度海に墜落する

ときのための備えである。100年に1度の津波が起き

て住民の半数が亡くなるならば今すぐ手配を始めるべきである。

■真冬の停電対策

12月23日大雪による送電鉄塔の倒壊でオホーツク地域への広域長時間停電が発生した。紋別市ほか2市8町に災害救助法が適用され自衛隊が派遣された。送電鉄塔倒壊は減多にあることではないが、2019年のブラックアウトの経験は今回に生きたらどうか。ブラックアウトでの神対応と言われたのがセイコマートの車からの給電である。セコマでは停電マニュアルとして車のシガーソケットからインバーターを経由して電気を店内に引き込みレジ周りと最低限の照明の電気を供給し続けた。100Wにも満たない電気でもこの備えのおかげで全道

多くの市民が食料と水を得ることができた。この経験は日本学術会議の停電シンポジウムでも発表され翌年の千葉県大停電で

も実践された。今トヨタの新型ハイブリット車には全車に1500Wのコンセントが標準

も実践された。今トヨタの新型ハイブリット車には全車に1500Wのコンセントが標準

準備されている。1500Wの電気があればLED投光器も携帯充電もパソコン、テレビ、通信設備も電気ポットも炊飯器も使える。一昨年の北見赤十字大学の災害訓練では、電気毛布50枚の実験も行い厳寒期での避難所に活用できることが実証されている。自治体はレンタルで良いので公用車をコンセント付ハイブリットカーに転換し、地域のディーラー店と停電時の連携協定を結ぶべきである。

「安心給電キット」を開発してある。あのブラックアウトが真冬に起きていたならばどんな悲劇が起きていたことか。当社では自治体避難所に1カ所1台の安心給電キットを寄贈しているのご遠慮なくお問い合わせください。

その際ひとつだけ気をつけなければならぬのは、避難所に避難される方の中には人

工呼吸器や吸痰器などを持参



筆者紹介 株式会社あかりみらい代表取締役 越智文雄  
1980年北大法学部卒業。北海道電力、電気事業連合会、北海道洞爺湖サミット道民会議事務局次長などを歴任。電力業界で初代の危機管理担当室長の経験から自治体・企業へのアドバイザーとして活躍。環境・エネルギー問題の専門家。日本除菌連合会長、(一社)次亜塩素酸水溶液普及促進会議代表理事、札幌なにかができる経済人ネットワーク主宰。